

大塚昌利著

『地方都市工業の地域構造』

——浜松テクノポリスの形成と展望——

一九八六年二月発行 古今書院
A5判 一九七ページ 二、八〇〇円



研究者が、わが研究の歩みから練りあげた成果を、一冊にまとめ、世に問うときの気持は、歓喜と苦悩の複雑な瞬間だろう。しかし、その時学者冥利に尽きることも事実である。とくに、最初に手がけた単著において然り。大いなる努力の結果であればあるほど、自信と不安が、交錯するものである。それは、自己主張と哲学を社会に投げかけた著者の、責任感や満足感によるものなのだろう。そこに

は、著者の意気込みと初初しさを感ずる。さて、著者は、過去二十年間、一貫して工業地域の研究を目覚し、彼の郷土静岡県で異彩を放つ、複合工業都市「浜松市」を研究対象として取り上げてきた。著者の興味と研究目的は、江戸時代から、大正・昭和へ、常に時代の変化を先取りし、新しい工業を育て、強靱に地域形成を進める浜松工業地域の地域構造と、その成長過程および地域的基盤を明らかにすることである。本書の論究姿勢は、複合工都浜松を、単に経済地理的に、生産体系の地域的展開を追うだけでなく、工業地域の形成を、地域の全体像、つまり地誌的な組み立てから、整理、体系化し、工業を浮き彫りにして行こうとする点にあるようだ。

本書は九章から成る。第一章は序論で、著者の研究視点、対象地域、従来の研究者の業績に触れる。第二章は浜松工業の特性を、発達過程や分布図を巧みに使い、工業誌的に述べる。第三章から八章までは本論、第二章で論じた工業誌を、時代的、発達史的に展開した各論にも相当する。在来工業からエレクトロニクス産業まで所在する浜松市の持続的、層序的な集積体系を、著者は工業活動の重層、多彩な地域構造と位置づけている。彼は複雑な工業地域の構造解明に、分析の武器として、立地・資本・技術・

人脈・組織化・時代背景・転換・土地柄など、多面的材料を駆使している。さて、第三章は織布業・木工業など従来の工業の成長を追う。第四章は浜松工業化の原像、繊維工業の分析、その成長と関連部門の増殖を、創業者の創意、企業の人材論から解説する。第五章は繊維から誘発された繊維機械工業の展開、ここでも創業者の努力やチャレンジ精神をクローズアップする。第六章は浜松特有の洋楽器工業の成立と関連工業の派生を論ずる。ここでは創業の山葉寅楠の存在の大きいことを指摘。第七章は木工刃物、工作機械の成立に触れる。木工刃物の発生を著者は江戸中期における木挽や鋸鍛冶にもとめている。彼はこれこそが業界発達の源泉であるとし、これが軍需工業と結合、戦後、本田宗一郎の二輪車工業へ急成長を遂げていったとしている。第八章では、二輪車工業の発展の可能性を、浜松の独自の産業風土と、多彩な下請工業集団の熟成に求めている。その際、織機工業と楽器工業とが、成立の先導的役割を果たしたと説明する。さらに、著者は本田など過占化の三大バイクメーカーによる四輪車進出への動向をも探る。第九章は結論と若干の考察である。著者は浜松の工業化を「藩政期の綿織物工業が先発工業の核となって、新しい工業を生み、先行産業が工業地域の形成とその持続に、大きく貢献した」と複合工業地域化した、一地方工業都市の産業企画

力の真価について評価する。著者は工業発展にみる工業相互間の密接なネットワークを整理し「連関図」にまとめている。これは、繊維・楽器・木工・工作機械・軍需機械・二輪車・ロボット・船舶・四輪車・エンクトロニクスに及ぶ、複雑な下請、部品関連工業まで包含する膨大な「工業時空構図」である。著者は、浜松工業地域にみる、有能で、意欲にみちた人材群像と、大小、複雑に絡み合った生産・流通構造の複合性にこそ、浜松工業の強味があり、さらに将来「浜松テクノポリス」への夢があると結んでいる。浜松地域の成長要因を著者は①優れた自然基盤、②資本の蓄積とその運用の妙、③職人に端を発する技術蓄積の厚みと優秀技術者の輩出、④東海道という交通条件の良さ、⑤工業化を支えた浜松の土地柄などから説明する。人間論、地域論を前面に、産業地域の形成をまとめようとする、工業地理学での著者の大胆な試みは、一応成功したものである。本書が、複合工業地域研究の必読書として、学界で評価されるには、今後著者の新しい視角に立つ第二、第三弾の挑戦を期待するものである。しかし、木目細かい配慮にもとづく資料収集、着実な論理展開、説得力に富む図表の提示などは、本書を初初しく、パンチの利いた好著としている。

(服部銈二郎)